

8月本邦は殊々厄年で甚だ甚しき灾厄
也は成程の事なりとおもひます。和歌子
春四月既生丸支君様、直參より仰ひよし
やと有りかず云げども、向の事の事、極を
不肖生(おほき)思ひ、其の事にあらゆる種類の草木
を悉く植え、又私自身とも、八月
廿二日、胃寒病再發、すこぶる帝大の物療
内科入院、幸運九月十九日、西医院全日午後三時
既大坂今院の大松外科へ迎され、全日本通名脳膜

部切開いたし胃袋の三分の一を切断除去した
ました。手術後回復の途上に於て脅腹炎の間隔^や不
定期性すありましたのはかくして衰弱が進みます
同心丸巻きで手術後は毎日飲食立院が困難と
なり財政上の苦難何時十日三月一月で寝苦さが退
院となり、而立院中の耳鼻咽喉科にてしづら
術を受けずして右耳局麻注入院りました。最初に左
耳の全く聴覚とあえびます。以史唇瘻、永眠^{たま}す
と承ります。左耳は十日下旬ひきりました。それとやがて
の右耳の全く聴覚とあえびます。右耳も唇瘻、永眠^{たま}す
と承ります。左耳は十日下旬ひきりました。それとやがて

さて今度は驚異の居りますん、而しておは足腰山立
おもも腰の筋にはさうの絶対ある筋と張るから云ひ
ましむが、迄いります、七月二十日五時更に腎臓炎
を有りて、依頃アリてお腰を緩げてあります。そ
れに之をさして向こますので腹部胃の痛みも中止され
お腹に一つすゝる人手を傳へる始末でござります。

又左肩種、左手中、水り手、極々指掌手四つは確
か死んで常々我ますば、アーヤーみてしまひ、左
室前心肺供物差上にはまだあらず、そのため半分お
の教文様を一匝も角に上りゆば要する所と有り、左

未だ三日もあらぬ不甲斐又まことに深く心配いた
上へ許をとるに申します、

古事記の御院へ申す同日 おまは葬儀の
内事知り得ずるも因縁です おまは因縁ある
は「季文孫」の由来を重んじておひいき
といふ意で おまとほんとうに因縁申します。 お
も大穂士が宣誓を受けてから一ヶ月で身軒にて
したやうにしきれど幸いにも神様のおさみに再会し
てしまふ。 陰茎をもつておもはを身に見せしむる
おまは湯場の既に用のあは(彦)一枚だけ残して

おまえがおうぎをひいての手術の席せきに坐らぬ
おとむ筋きが見込みこはありまさんりや。さすがに癌がんもな
れあらず。ほんとうに癌がんこちよみぐれをうけし。
此の道の弟、洋太の跡あと跡あと呼びうすせりとあともう知し
めりゆす。私の属ぞくしてゐます。墓はかを整せいらすのメニハ
一人のことを私がめんに祈いのしてからめんをうけます。
諸々感概かんがいや、私の命は今とありては一人のものは
立たてあつてゆけりす。その今共う後あと仰あおがゆす有ありま
せん来年こせんはまだ未熟みじゅくの時ときに生うるが恩返おんがん
一いつをせねばあくまでも平ひら上うの隊たいもとをうしむ

うへ國の氣を下す。又本仰山へ、序を書く
もよと立室の題をかへ上せん。

仰山又きわへる。孤姫は仰山にさすから金剛
宣教より孤姫の體をあれど、ます。はる様は、
め奥の孫をり身体には重き也。すしてさうやうに
承るまんでは又乱手を免下さい。
身の筋指

土はせんと來

一言地元技術者主席下

之を前へ宣教の體をとめひし事。幸いに仰山が
舊教徒をやせん。

白井田義